一人じゃない　～愛～

レン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一人じゃない　～愛～

【Ｎコード】
Ｎ１５２３Ｄ

【作者名】
レン

【あらすじ】
何で私の名前は、《愛》なの？誰からも愛されることなんか無いのに…誰も信じられない。親、彼氏、親友、恋、裏切り、壊れかけてる私…でも心から愛してくれた人がいた…その胸に飛込んでイイの？幸せって感じる事が出来るの？私は、あなたを幸せに出来るの？

フラッシュバック

この男は、誰だろう？何で私は、ここに居るんだろう？何で汚れた言葉を吐き続けるの？

「愛、聞いてるのか？」聞こえ無い、聞きたく無いよ。痛い、痛いよ。助けて誰か助けて…

「取り合えず金借りて来いよ！金がないなら要ら無いんだよお前。」壊れちゃうよ助けて。

ボロボロになるまで毎日の様に、蹴られて殴られてた。でも最後は、いつも腫れた所に冷えたタオル当てながら、ごめんねって謝ってくれた。それが凄く優しくって、堪らなく嬉しくてまた正樹に言われた通りにしてしまう。

「さっきは、ありがとうございました。愛です！」

「立花　正樹です。愛ちゃんもう大丈夫？１９才だったら一緒に飲もうって訳にいかないねぇ～」

正樹との初めての会話は、こんなだった。

悪友冴子の誘いで、パーティーコンパニオンのバイトに行った時だった。冴子は、高校から一緒で金持ちお嬢。誕生日が一緒で意気投合。簡単な始まりだ。

卒業してから、冴子のお父さんが借りてくれたマンションで好き勝手に楽しく二人暮らし中。私のふんわり萌えキャラの正反対の冴子は、ハッキリクッキリ顔の派手キャラで周りの女達に誤解されやすい

「私が美人だから、ブス達が、ひがんでるだけでしょ！ホカっておきゃイイよ」っていっつも言いながら内心かなりテンパってる所が可愛い。

パーコンの新しいユニホームは、淡いブルーの胸元が結構開いたミニワンピだ。前のショッキングピンクよりマシだ。冴子は、バイトなんかする必要無いのに私に付き合ってくれる。

「何でも人生勉強！」って気の使い方が冴子らしい。
挨拶も終わり宴会が始まる。私は、客の中でもオヤジに好かれる。しかもエロジジィだ…「君いいねぇその童顔でその大きなオッパイ！チップあげるからちょっとだけ、ね、ちょっとだけだから」って汚い手を伸ばして来た。何の集まりか知らないが、大きな席だ。きっと普段は、マジメに仕事して部下に、パワハラ、セクハラって言われたら大変だから、おとなしいオヤジなんだろうな。
折り畳んだ千円札を胸の谷間に差し込みながら指を動かして乳首を探してる。気持ちが悪い。
「やめて下さい！チップなんか要りません。嫌！」オヤジの手を振り払い席を立ち上がったらオヤジに腕を捕まれて
「何言ってるんだ！他の女の子は、皆させてるじゃないか、いくら払えって言うんだ！ガキが調子に乗るな！」酒臭い息がかかるほど近い。嫌だやめて！やめて！
「杉原課長、飲み過ぎですよ。大丈夫ですか？課長の娘さん位ですよね彼女。もしかして、娘恋しくなっちゃったんですか？」
「何言ってるですか立花さん、私は、少しからかってみただけですよ。」明らかに動揺してる。その隙に私は、立ち上がりトイレへと逃げ出した。頭を冷やさなきゃ、仕事なんだし、あのオヤジとお父さんが重なって怖かった。

無力

中学二年の時、お母さんが、新しい男を連れて家に帰って来た。そういう時は、お母さんは、母親じゃなく卑しい女になる。その男は、華奢な今までと違うタイプの若い男だった。いつもの悪い病気だ。私は、挨拶もせず小遣いを渡されて家を出される。夜朝関係なく…小さな頃から、そんな私に付き合ってくれるのは、同じ様な環境の子達だ。

よくテレビで手を繋いで仲良くお買い物をしている親子が写っているが、私には、理解出来ない。

冷たい鍵を使い重い扉を開いて誰も居ない家の中に

「ただいま」と声をかけるそこには、家庭と言う暖かい物は、何もない。あるのは、テーブルに少しのお金とカップラーメンだけだ。それが普通だと思って生きてる子達としか一緒にいれなかった。

母子家庭で母親がスナックに勤めてるから朝まで誰も居ない佳世の狭い家が溜り場になってた。いつも誰かがいて一人にならなくて済む

「佳世〜居る？」鍵は、いつも開いてるから勝手に上がり込むと佳世が毛布にくるまり声もなく横たわって泣いていた。

「佳世？佳世？どうしたの？佳世？」

「来ないで、見ないで嫌！」叫びだした。毛布がめくれた。佳世は、裸だった。何これ？何で裸なの？

唇が切れて出血していた。中学生の私にでもどんなことがあったのか想像がつく。でもどうしていいのか分からない。相談出来る大人も居ない頼れる人も知らない。

「佳世…佳世、先輩達にヤラれたの？ヒドイよ、何でこんなん事するんだよ！佳世、私どうすればいい？どうしよう？病院行こうよ。お母さんに連絡しようよ。佳世、佳世？」佳世は、思いっきり私をぶった。

「あんたは、いいよね！キレイなままで、私が汚れたからってあん

たに関係無いだろ！心配したフリなんかしないでよ！愛もババァと一緒だよ！私の事見てお前は、汚いから汚い奴らしか寄って来ないんだよ。早く風呂に入りな！見たくも無い。って私に触りもしずにまた出てったよ。愛も私の体に触れ無いんだね。」そんなつもりは、無かったけど確かに抱き締めて一緒に泣いてあげれない私がいた。

「帰って！もう帰って！」殴られた痛みより、佳世の言葉が痛かった。

家の電気が消えてる。男が来てるのか。佳世が汚い？あの女から産まれた私の方がもっと薄汚い。

佳世は、あれから私を避けてる。学校にも来なくなった。私は又ひとりぼっちになった。一人のまま中学を卒業した。家族も友達も居ないまま…

新しいお父さん

制服と新しいお父さんが来た。
「愛、彼の事知ってるわね。愛も高校にも入って大人になったし、お母さんね、彼と再婚したの。だから今日からあなたのお父さんよ。かっこいいお父さんでしょ？良かったわね。」
この人何言ってるの？良かったのは、あんただけだよ。彼の事知ってる？もちろん知ってるよ。あんたの男でしょ？変な生き物みたいにその男の腕にぶら下がって笑ってるあんたが一番嫌いだ。お父さん？どうでもイイよ好きにすれば？
「愛ちゃん高校入学おめでとう！今日からよろしくね。」あの華奢な若いだけの弱そうな男だ。その男が今日から家族になった。偽物の家族だ。でもこれからは、家から追い出されてフラつかなくても良くなるかな…
ただそれだけだ。
空ってこんなに綺麗なんだ。
公園のベンチに寝転がって久しぶりに見上げた空は、びっくりする位青かった。セミの鳴き声がどんどん大きくなって来た。もうすぐ１７才の誕生日。まったく同じ日に産まれた冴子と一緒に祝う予定。同じ日に産まれたのに冴子は、私と全く別の人生を生きている。あったかい家、家族、友達。不公平だ。誰に何を言っても解決出来ない。
凄くイイ子だけど、本当の自分の事は、話せない。
相変わらず私は、一人ぼっちだった。
お母さんのフリをしているあの女は、一応看護婦らしい。笑っちゃう。娘の世話は、しないのに病人の世話をする。笑える。夜勤とかゆーのがあって家に帰らない日が多い。そんな日は、お父さんと名乗る男と二人になる。話す事なんて何も無い。会話も無く食事をする。聞こえるのは、バカバカしいテレビの音だけだ。

「愛は、女の子から女に変わってきたな。お父さんは、将来が楽しみだ。彼氏はいるのか？」気持ち悪い。その作り笑顔も私を女として見てる笑って無い目も、全部気持ち悪い。
今日もやたらと、酒を飲んでいる。怖い。
私が寝たのを見計らって酔ったあの男が、部屋に入って来る。酒臭い息を吐きながら近付いて来る。汚い手で私を触り続ける。固まってしまう。怖いよヤメテ、ヤメテ！かたく目を閉じて寝たフリをする。もうすぐしたら終わるから、もうすぐだから…触るだけだから、最後まではされないから大丈夫だよ。大丈夫…

誕生日

太陽が私を焼き付くしてくれたらいいのに。ただ暑いだけの夏なんてキライだ。あの男が居る家に帰りたくない。冴子の家での誕生日バーティーの後泊めてもらおう。今日は、グッスリ眠れそうだ。

「家のパパとママ愛の事大好きみたい。凄く楽しみにしてるんだよ。私の誕生日でもあるのになぁ！」ってぐちってたっけ。そろそろ行くかな。

今日は、冴ママに買って貰った冴子とお揃いの靴を履いてきていない。時間も余裕があるし折角だから履き替えて来よう、まだ誰も帰って来てないはずだだし、

鍵が開いてる…

帰ってるんだ。靴だけ取って行こう。

「愛？何処に行くんだ？男の所か？」出てこなくていいのに。かなり酔ってる。ヤバイ。靴を取って逃げようとしたら、あの男が腕を掴んで

「何処に行くんだ！」って怒鳴った。

「冴子の家で誕生日祝ってくれるって…」

「今日は、誕生日か。お父さんも愛にプレゼントをやるよ。来いよ！」いらないよ！触るなよ！はなせよ！髪を掴まれて部屋に引きずり込まれた…

「出ないなぁ～携帯にも出ないなんて愛どうしたんだろ？約束の時間とっくに過ぎてるのに。」

「愛ちゃん急用が出来たんじゃないの？二人の為にママお料理頑張ったのに残念ね。」

「でも、連絡も無いなんて愛らしくないなぁ。プレゼントも渡したいし…愛の家に行って来る！」

「もう遅いし、ご家族でお祝いしにお出掛けしてらっしゃるんじゃないの？」

「もう！分かったわよ！ママが送って行きますよ。言い出したら聞かないんだから家のお嬢さまは！ママも愛ちゃんにおめでとう言いたいしね。」
「あぁ～それが本心でしょ！」
携帯が鳴ってる。ウルサイ。そうか今日は、誕生日だ。誕生日の思い出なんて何もない。良い事も、悪い事も。どうでも良かった…
何かが起こる訳じゃない。いつもと変わらない日だ。
「愛、お前初めてだったのか。これから俺が、男の色んな事教えてやるからな。何処に出しても恥ずかしく無い女にしてやるよ。」
初めて死にたいと思った。私は、ただのガキだ。あんなに嫌いな母親に助けて欲しいと思った。
身体中から、あの男の臭いがする。あの女は、こんな事されて楽しんでるのか？分からない。どうでもいいや…涙も出てこないよ遠くからチャイムの音がする。ドンドンドン
「誰だウルサイな！イイ気分なのに。」ガチャ。
「すみません、私愛さんと、今日約束してたんですけど愛さん居ますか？」
「あっ愛なら気分悪いって寝てるよ。用が無いなら帰ってくれよ。」
冴子…？嫌だ！こんな事知られたくない。帰って、帰ってよ！冴子、何も気ずかないで帰って！お願い。
「愛にプレゼントだけ渡して下さい。おやすみなさい。お大事に。」
ほっとした。これで何も変わらない明日を迎えられる。

居場所

「すみません！すみません！いらっしゃいますよね！私、冴子の母です。開けて下さい。」
「なんだってんだ。」
あの男を押し退けて冴ママが部屋に入って来る。
「……」私を見ても何も言わない。もうダメだ。汚れて汚い子。可哀想な子。私の事を対等に見てくれた人だったのに。失ってしまうの？バシッ、バシッ。いつも優しい冴ママが震えながらあの男に手を挙げている。その優しい手を、そんな事に使わないで。私は、洋服を着せられ車にゆられていた。冴子の暖かい家に着いた。誰も口を聞かない……
「明日、ゆっくりお話しましょう。」冴ママは、まだ震えている。私は、大丈夫だよ怒らないで…。冴子は、ずっと泣いている。何故泣くの？私は、泣いて無いのに…。温かいお風呂に入って、暖かい布団に入った。
ん～ん誰？泣いてるの？
夢？冴ママ？私の頭をなぜながら、声を殺して泣いている。泣かないで、泣かないで。ごめんなさい。悲しませてごめんなさい。冴子ママの優しい手だ。もう少し寝たフリをさせて下さい。私は、ゆっくりと眠りについた。「おはよう愛ちゃん。お話しいい？」
「はい。」
「今日お母様は、お家にいらっしゃる？」
「たぶん。」
「じゃ一緒に昨日の事お話ししに行きましょう。このまま黙っている訳にいかない事だから。大切な娘にあんな酷い事されて…愛ちゃんと同じ位ショックでしょうけど…」
大丈夫だよ。そんな女じゃないよ。でも少しは、懲りたりするのかな？

少しは、私を見てくれるかな？
家に帰るのは、嫌だったけど、二度とあんな目にあいたく無いけど、私の居場所は、あそこしかない。
冴ママに連れられて家に帰った。
あの男は、居なかった。
母親は、今日も機嫌が悪そうだった。冴ママをジロジロいやらしく見てた。
昨日の出来事、その前から触られ続けてた事。怖かった事。全部話した。冴ママは、ショックを受けて固まってた。
母親の手が飛んできた。
「私の男に、旦那に手を出しやがって！このクソガキが！お前が誘ったんだろ！汚いガキめ！お前なんか産むんじゃなかった！死んでしまえ！許さないからな！出てけ！二度と現れるな！」殴られまくった。冴ママも止めようとして突き飛ばされた…
「あなたは、母親じゃない！そんな資格はない！ただの狂った女よ！愛ちゃんは、家で預かります。愛ちゃん帰りましょう！」
「母親？好きでなったんじゃないね！私は、女！女だよ！あんたには、一生分からないだろうけどね！アハッハッ～」
バタン
玄関のドアを閉めても笑い声が聞こえる。頭の中でもなり響いている。私は、二度死んだ。殺された。お父さんだと名乗る男に、お母さんのフリをした女に……

冴ママ

私は、バカだ。
少しだけ、少しだけ、お母さんに期待してた…
本当は、振り向いて抱き締めて欲しかった。
一度でいいから暖かい手を差しのべて欲しかった。

冴ママもあきれちゃったよね…しょうがないよ
これが私の家族だから…
会話も無くうつ向きながら歩いてた。
その時
冴ママが急に触り向いて
「愛ちゃん」
「愛ちゃん」
急に強く抱き締められた…こんな時なのに、嬉しかった。
暖かい優しいニオイだ…
これがお母さんのニオイなのかな?冴ママが私のお母さんだったら
良かったのにな〜
何で産まなきゃ良かったナンテ言うの?私の事キライだから?イラナイから?
何で私の名前は、《愛》なの?愛してなんかくれなかったのに…
私は、この名前が大キライだよ!キライだよ…

急に涙が溢れて、止まらなくて、どうしていいのか分からなくて……
ずっと泣いたりしなかったのに。
冴ママの優しさに触れたからかな?
どうしたら止まるんだろ?
「愛ちゃん、おばさん愛ちゃんに又辛い思いをさせてしまってごめんなさい。ごめんなさい…」冴ママ泣かないで、泣かないで。

「何も気付いてあげられなくて、辛かったね…苦しかったね…愛ちゃん、たくさん我慢してたのね…頼りないおばさんでごめんなさい…」
私は、冴ママの暖かい涙を指ですくった。涙ってこんなに暖かいんだね。
嬉しかった。私の為に怒ったり、泣いたりしてくれて。ありがとう。
こんな私を抱き締めてくれてありがとう。
大好きだよ。
私も冴ママを力イッパイ抱き締めた…
冴子は、こんなイイママがいて幸せだよ！
私は、初めて人に抱かれながら声をあげておもいっきり泣いた……

正樹

あれから2年がたった

あの時、冴子や冴ママが居なかったら私は、どうなってたんだろう？
多分、落ちまくって先の無い闇の中にいただろう…
今でも男が怖い。信じられ無い。汚い。
男をバカにして高みに登って自分を保っている。

鏡に写った自分の顔を見て笑った。
《大丈夫もう誰も愛を傷付けたりしないから…愛は、強いから誰にも負けないから、怖くない！》
自分に暗示をかける。

今日は、バイト中に助けてくれた立花　正樹と言う男と会う予定だった。

怖いのになんだかワクワクしてお洒落までしておかしな気分だ。
気まぐれか？
他の男と違う少し派手だけど優しくて頼りになる大人の男だからか？
冴子には、心配かけたくないから何も言わずに家を出た。
待ち合わせは、小さな喫茶店。
各テーブルに可愛らしい花が飾ってある。
お店のママさんは、ドッシリしていたがとても愛想のイイ感じのやわらかい人。淡いピンクで統一されていて女の子が好きそうな感じに出来ている。
正樹は、女の子を喜ばすお店探しがウマイなぁ～
何処でリサーチしてくるのだろう？
遊び慣れてるの？

やっぱり帰ろうか？
イロイロ考えてる間に正樹が店に入ってきた。
「いらっしゃいませ～あら？久しぶりねぇ！最近顔見せてくれないから忘れちゃうところだったわよ～」
「ママ久しぶり！ご無沙汰してました～今日は、待ち合わせだから又ゆっくりくるわ」
常連なんだ…
私を見付けて笑顔の正樹が近付いて来る。
「ごめんね待たせちゃったね。」
「ん～ん待って無いよ！」
いつもなら確実に怒るのに何故か嘘をついた
氷の溶けたアイスココアを見て笑った。バレバレじゃんか
「本当にごめんね。お嬢様のご機嫌が急降下する前に美味しいもんでも食べに行こう！」
黒い大きな車に乗って着いたのは、大きなビルが立ち並ぶ中の中華料理店だった。
正樹が私の手を取ってエスコートしてくれる。
ウエイターが入り口に立っていて窓際のテーブルに案内された。
スッゴク立派で緊張しまくった。
ウエイターが後ろに立ち椅子を押してくれる。
こんな経験がない私は、ビックリするばかりだ。
どうしよう正樹は、呆れちゃってるよね。
こんな子供、笑っちゃうよねぇ！
嫌だなぁ～こんな店で何食べても味なんか全然分かんないよ。
正樹が不意に立ち上がって笑顔のまま
「行こう！」ってまた手を引かれて店を出た。
恥ずかしいから店に居たく無かったんだよねきっと…なんだか凄くミジメ…
高飛車に成りきれない私が凄く嫌だ。
手を引かれて着いたのは、見慣れたハンバーガー屋

ここにしよう！
安いハンバーガーを二人で食べた。
いつもの調子に戻って話も弾む。
「何で高級店からいきなりこの店なの？」
「愛ちゃんが笑ってくれなかったからだよ。」
は？そんだけ？
「今は、イッパイ笑顔だからこの店にして正解だったね！」
分かんない男だ。でも少し嬉しいかも…

冴子

毎日毎日、正樹の事ばかり考えてる。
今何してるのかな？
今日は、連絡無いの？
あの笑顔を見ていたい。
触れてみたい。
少しハスキーな正樹の声が聞きたい。
正樹の香りに包まれたい

私どうしちゃったんだろ？何か変だ…
連絡が有るか無いかだけで一日の気分がまったく違う。落ちたり上がったり忙しい。
意味も無く溜め息が出る。毎日落ち着かない。

「愛～何か恋する乙女入ってなぁ～い？ん～？」
全身が熱くなる。
「もぉ冴子何言ってるの～馬鹿じゃないの？」
へ？恋するとこんなに心の中グチャグチャになっちゃうの？意味分かんないよ！
初めて出てきた自分じゃなくなりそうな感情に飲まれそうになって行く。
冴子に何と無く言えないままでいたから、丁度イイタイミングだ。
このモヤモヤの正体を見破って貰おう！
冴子は、ニコニコして聞いてくれた。
「愛ちゃ～んそれは、恋しちゃってるってゆ～んでちゅよ～分かりまちゅか？
で？次の約束は？年は？
で？仕事は何してるの？

で？もちろん女関係キレイなんでしょうね？
で？いつちゃんと紹介してくれるの？……」
もぉ～質問しすぎ！
ってかまだほとんど何も知らない。
沢山話してるのに正樹は、自分の事あまり話さない。私もちゃんと話して無いけど…
知られたく無い事ばかりだから…
正樹もそうなのかな？
こんな私が恋するなんてイイのかな？
臆病なわたしが囁く…
無理だよ全部話したら引くって誰も愛の事なんて愛してくれないよ。もぉ傷付きたく無いなら一人でいた方が楽だって！
暗い気持ちが押し寄せる
冴子が私の手をギュッって握って
「愛！何考えてるの？もしかして始まる前から終わらせようとしてるの？バッカじゃないの？愛は、今までの分取り返して最高に幸せにならなきゃ！沢山笑って沢山楽しい思いしてよ！」
「正樹に悪いよ…騙して…隠して…汚れてるんだよ。恋するなんて出来ないよ…冴子には、分かんないよ！キレイ事並べんなよ！」
「愛…」
「愛、ちゃんと聞いてね。愛は、何にも悪くないんだよ！汚れてなんか無いよ。愛の事ずっと隣でみてきたのは、私だよ。いつも強がって一人で平気！って振る舞ってるけど本当は、誰よりも弱虫で、寂しんぼで、誰かに守ってもらいたくて助けてほしいって心の中でいつも叫んでたんでしょ？自分を出して本気で叫んでみてもいいんじゃない？私には、心配かけたくないからっていつも何も話してくれないけど今日は、話してくれて嬉しかったよ。愛、過去に負けたりしないで！愛が初めて自分の事受け止めて欲しいと思ったのが正樹さんなんでしょ？少しずつ前に進もうよ！ゆっくりでイイからさね、愛？」

冴子…
ごめんね。ごめんね。
ヒドイ事言ってごめんね。冴子の優しい気持ちを傷つけてごめんね。
そうだね、いつも一緒に居てくれたのは、
冴子だね。悲しい時も楽しい時も私の隣に居てくれたのは、冴子だね。
ありがとう冴子。
固い分厚い殻が暖かい涙で溶けて消えていった…
手を取り合い子供の様に声を出して二人で泣いた。
一生の親友愛する冴子と…

恋する

冴子にイッパイ勇気を貰った。
正樹に恋してる。
正樹と一緒に居たい。
正樹は、私の事どう思ってるのかな？
伝えよう私の気持ち。
伝えよう私の事。
嫌われたら？
その時は、冴子…よろしくね。
冴子の暖かい手を握りながら正樹の携帯を鳴らす。
プルルルル…プルルルル…
「はい。」

正樹の声だ
いつもみたいに普通に…軽い感じで…
決心したはずなのに、言葉が出て来ない。

「もしもし？」
汗が滲んで心臓が壊れそうなほどドキドキしてる…

「もしもし？迷惑なんだけど。」
プツッ…プープープー
電話が切れた
え？
何も喋らなかったから？
機嫌が悪かったのかな？
電話するには、時間が遅かった？
液晶には、通話終了の文字。

イタズラだと思われた？
でも《愛》って登録してあるよね？
やっぱり怒ってる？
どうして？どうして？どうして？何で？
「愛？」
「何かね、切れちゃったみたい。」
「もう一度鳴らしてみれば？」

今日は、イイや…
凄く落ち込んだ。
心臓からさっきまでのドキドキと違うドキドキの音がしてる。
たった一回の電話で、こんな気持ちになっちゃうなんて、本当にどうかしてる。もう連絡来ないかも…
嫌だよ。嫌だよ。
心が壊れちゃうよ。
冴子、せっかく応援してくれたのにごめんね。
眠れないけど、冴子にオヤスミを言ってベットに潜り込んだ。
何も考えれない。
このまま消えてなくなりたい。
涙も出ない。

こんなのが恋なの？

私ってなんだか悲劇のヒロインごっこ入ってない？
ありえなぁ～い！
って思ってた人種の仲間入りしてない？
はぁ～
正樹からのメールもなく朝がやって来た。
何時だろ？
どうでもイイや

本当に心って穴がアクんだぁ～
生きる気力って本当に無くなるんだぁ～

元気いっぱいの着メロが鳴ってる。今聞くとどうしてこの曲を選んだか判らない。ダサイ。
ウルサイ！早く切れろ！
公衆電話？
「はい？」
「愛ちゃん！俺！正樹～」
えぇ～正樹？
「携帯壊れちゃって液晶パーだよ！でも愛ちゃんの番号だけは、覚えてたから助かったよ～今からショップ行って機種変してくるからさ、ちょっとの間繋がんないかも。愛ちゃん？」
も～ばかぁ！ばか！ばか！ばかぁ～
あぁ～勘違いしまくって
落ち込みまくってハズカシイ！
さっきまでの私のイライラするぼどの長い時間返して！
冗談みたいに気持ちが浮いてきた。
少し安心して、少し気が抜けた。
正樹と会う約束をして電話を切った。
冴子～冴子～！
ばかぁ～な私のはなしを聞いて！足取り軽く冴子を起こしに部屋を出た。

この時、この公衆電話からのこの着信に出なかったら私は、普通の違う人生歩いてたかな？普通に他の男に恋して結婚してたかな？
神様。ツライ思いは、沢山してきたから私を助けてクダサイ…私は、この時何も知らず暗い階段を降り始めていた……

動物園

正樹！正樹！正樹！
世界中のみんなに伝えたい～
私、正樹に恋してる！
早く会いたい。
待ち合わせの時間まで、待ちきれない！
1分だってもどかしい。
普段ならテレビ見ながらダラダラ時間をかけてするメイクも手の動きが早い。
なぁ～んだやればできるじゃん！完璧！
洋服選びも冴子と大騒ぎした結果、お嬢白ワンピに決定！
巻き髪は、2度やり直し。
今日の私は、完全無敵！
そう！
正樹に告白するつもりだ！勝っても負けても悔いの無いように、完璧な自分で挑みたいの。
「何の勝負？勝ち負けじゃないと思う…けど？」
冴子のニヤニヤ顔を無視して気合いを入れなおす。

今朝までのショボくれてた気分が嘘のようにはしゃいだ。いつぶりだろうこんなに楽しい気持ちになったのは。
「愛ちゃん～行ってらっしゃ～い！おみやげ話楽しみに待ってるから～早くかえって来てよ～」
冴子に見送られて家を出る。
正樹の車のクラクションが聞こえた。
着いたよ～早く出ておいで～って聞こえる。
転んじゃいそうな勢いで車まで走った。
正樹が車の中から手を振っている。

助手席に乗り込み
「お待たせ～」
「そんなに走ってどうしたの？息切れしてるし…クックッ」
も～笑わないでよ！
すねた真似して口を尖らす。
「ゴメンゴメン。今日の予定は、どうしますか？お嬢様？」と言いながら私の頭をポンポンする。
なんだか幸せだ。
「今日は、どうしても動物園に行きたいの！ダメ？」
「動物園？そんなに可愛いい格好なのに動物園でイイの？」
「イイの～！出発！」
ハイハイって感じで車が動き出す。
動物園は、天国に行ってしまったお父さんとの思い出が沢山詰まった場所。
お父さんと二人で作ったデコボコの形したおにぎり弁当を持って手を繋ぎなからよく行った。
「愛、大人になっても動物園一緒に来ような。」
って帰り道お父さんは、ちっちゃな私にいつも言ってたなぁ～
思い出すとまた悲しい気持ちになりそうで、お父さんがいなくなってから一度も行って無い。
動物園は、お父さんとの思い出の塊だ。
あそこに行けばお父さんから勇気がもらえそう

シートの下に何か置いてある。
何？子供の小さな赤い靴だ。可愛い。
正樹の友達の子供のかな？
正樹と結婚して子供産んでこんな可愛い靴履かして一緒に動物園行けたらいいなぁ～
まだ告白前なのに色々空想してニヤケてた。
正樹は、ちょっと不思議そうに私を見ていた。

お弁当作ってこれば良かったなぁ～
道は、空いてて順調に車は、進んで行った。
駐車場がかなり混んでてちょっとグッタリ。
「動物園なんて何年ぶりだろう？凄い人だなぁ～愛ちゃん人混み大丈夫？」
「うん！大丈夫だよ～」
「俺ちょっと苦手だよ～」
エェ～でも今日は、我慢してよぉ～
「でも愛ちゃんと一緒だから頑張ってみますか！」
ってニッコリ顔
カワイイ～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1523d/

一人じゃない　～愛～

2010年12月15日14時14分発行